

南のひと 29

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



竹富島出身の前本とわさんを初めて撮影したのは、彼女が赤ちゃんの頃だった。とわさんのお祖父さんにだっこをされているところを撮影したのが最初だったと思う。今から約20年ほど前のこと。

とわさんが小さかった頃は、あまり他の子どもたちと遊んでいる姿を見かけなかった。一人で遊んでいる姿は寂しそうでも無く、とても自然に見えた。

彼女の家の隣には御嶽があり、大きなガジュマルの木が生えている。以前私が暮らしていた家が、この御嶽の近くだったこともあり、とわさんがこの場所で遊んでいる姿を良く見かけた。

あるいは、夫の店で店番をしていると、音も無くひょこりと現れ、気づくといつの間にかふわりと居なくなったりしていた。不思議な空気感をまとったとわさんを写真に写したくて、何度かカメラを向けたけれどいつもフレームに収まる前にすると走りさっていった。

私の持つ彼女のイメージは、木の妖精とか、キジムナーとかそんな感じだった。

一枚目の写真は、彼女が小学一年生の頃に学校からの帰り道に撮影した一枚。二枚目の写真は、彼女が高校を卒業して八重山から離れて行く前に撮影した一枚。

現在東京で暮らすとわさんを想う時、「彼女には今、何が見えているのかな？」と考える。東京の雑多な人混みの中、あの空気感をまとったとわさんが静かにこちらを見ている姿が目には浮かぶ。



水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 30

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



登野原利子さんは、友人のお母さんで、私が竹富島に移り住んだ頃から「アキちゃん！」と声をかけて可愛がってくれた。道ですれ違ったり、友人宅の庭先で顔を合わせたりすると「ありがとうねえ。アハハハ」とよく笑いながら声をかけてくれた。

今は、竹富島を離れて石垣島で療養生活を送っているのですが、以前のように顔を合わせることがなくなってしまったけれど、時折風のない晴れた日に、利子さんのことをフッと思い出し会いたくなる。

私が知っている利子さんは、誰とも被らないオリジナリティの持ち主だ。満月と新月を同時に持ち合わせたような、大潮と小潮が混在しているような、光と影の境界線が存在しないような、言葉では表しにくいけれど、沖縄の自然の中に「居る」人だ。そしてコロコロと変わるその表情でいつも私をグッと惹きつける。そんな彼女が好きで何度も写真を撮らせてもらっている。

利子さんは真夏の暑い日にも自転車を引きながら新聞を配達したり、商店へ買い物に出かけたりしていた。郵便局などに行くために私が車で集落内を走っていると、利子さんが木の陰で一休みしている姿をよく見かけた。その度に、「あ、利子さんだ」と心の中で呟き、用事を済ませて帰る時ただ気になるというだけで、同じ道を通って利子さんがまだそこにいるかを確認したりしていた。

利子さんには、咲き乱れる南国の花に負けない存在感があり、満開のブーゲンビリアがよく似合っていた。

今日みたいな風のない晴れた日には、大きな福木の木陰で、自転車を脇に停め、しゃがんで一休みしている利子さんの「ありがとうねえ」という声が聞こえる。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 31

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。

竹富島出身の上野虹紀（うへのにき）さんは、今年八重山高等学校を卒業して福岡の美容専門学校へ進学する。

虹紀さんを初めて撮影したのは彼女が小学2年生の頃だった。商店へ向かう途中の道で見かけた虹紀さんは、白いシャツに短パン、ジンジャーエールを片手に島サバ（ビーチサンダル）というスタイルで、まさに「島の子」。真っ黒に日焼けして屈託なく笑うその姿に魅せられてシャッターを切った。

今年の2月、夏のような日差しが眩しい昼下がりに、虹紀さんの今までのこと、これからのことを聞かせてもらった。

「小さな島の小規模校から大人数の高校へ進学した時には、色々な性格の人がいて大変なこともあったけど、そこから学ぶものも多かった。小中学校の時にバドミントンの大会や体験授業の時に出会った友人たちがクラスにいたことも心強かった」と高校へ進学した頃のことを振り返りながら話してくれた。

去年は、高校生活最後の年なのに、頑張って活動してきた郷土芸能部で予定通り発表ができなかったのがもどかしかったと、新型コロナウイルスの影響により悔しい思いをしたことなども教えてくれた。

「将来の夢はファッション業界で仕事をする」と話す虹紀さんの口調は明るく軽やかで、これから先に広がる未知の世界への期待がその話し方や仕草から滲み出ている。

最後に、「この島で育って良かったと思うことってなんですか？」と聞いてみた。

「え、何だろう？ いつも島に帰って来て会う人みんなに言われて嬉しい言葉でも良いですか？ ここにグッてる言葉」

「それはどんな言葉ですか？」

「おかえり」



水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 32

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



前本武子さんは、多良間島から竹富島にお嫁に来て、沢山の苦労と喜びを体験して来た島人だ。

武子さんは、7人の子どもたちを育て、時折遊びに来るその孫たちや夫の隆一さんを訪ねてくる大勢の来客の面倒も丸ごと引き受けてきた肝のすわった強い人。そんな性格から島の人は武子さんのことを「武子母ちゃん」と親しみと敬意を込めて呼んでいる。

私たち家族にとっても竹富島に移り住んだ頃からずっとお世話になってきた島人の中の一人だ。私がまだ島に来たばかりの頃、お祭りの時に着物の着付けが一人でできず、半べそをかきながら帯を片手に「武子母ちゃん、着物着せて！」と走って行ったこともあった。

野菜が採れたらもらいにおいでと声をかけてくれたり、娘が生まれてからは、手編みのスカーフをプレゼントしてくれたり沢山可愛がってもらってきた。とにかく常に手を動かしている人で、いつ遊びに行っても何かしらの手作業をしている。

私が武子さんと過ごした忘れられない一番のエピソードは、天気の良い昼下がり、島ピン（島ニンニク）と竹ざるを持って畑へ行き、剥いた皮をザルをふって風に飛ばす作業と一緒にしたことだ。何でもない日常の一コマだったのに、今でもはっきりと覚えている。

風を読み、ゆっくりとザルを振る。光を通す島ピンの薄い皮がハラハラと風に舞い飛び、それはとても美しかった。

彼女に会うと、別れ際に、「はい、負けるなよ。頑張れ」とよく声をかけられる。その声には、「同士よ。お互いに頑張ろう」という心意気みたいなものを感じる。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 33

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



東盛あいかさんは、小学2年生の時に沖縄本島から母親の出身島である与那国島へと移り住んだ。子供の頃から活発で勝気だったあいかさんは、小さい頃から走ることが好きだったようだ。高校へと進学した10代の頃は目指す目標が定まらず悩んだ時期もあり、その時に会ったのが映画の世界だった。京都の芸術大学に進学すると、映画学科の俳優コースで演技の傍ら制作も学び、現在は東京の芸能事務所に所属しながら俳優業と同時にクリエイティブな方面でも活動を開始している。

あいかさんには、初めて会うのに、なんだかずっと前から知っているような、不思議な感覚を覚えた。それは多分、彼女が大学の卒業制作で主演、監督を務めた映画、『ばちらぬん』をネット配信で観ていたからかもしれない。作品は作者を映し出す鏡のようなもので、彼女の映画を観たことで、まるで既に彼女に出会っていたかのような気分になっていた。

彼女のものごとに対する眼差しの向けかたは自分のそれと重なるところがあり、話していて惹かれ合うものがあつた。「主観的であると同時に客観的でもある」とか、「とても近くて、遠くもある」といった感覚は、育った環境は違っても、写真や映像に対して持つ言語が近い者同士が分かり合えるものだ。

あいかさんを想う時、与那国島の深くて濃い、うねる群青色の海と、頬を強く撫でる風を連想する。

水平線の、さらにその先へと伸びる道を、風を切って疾走するあいかさんの姿が目に見えかぶ。強く蹴り上げる彼女のかかどが刻むリズムは、与那国島の鼓動そのもの。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 34

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



竹富島出身の内盛^{うちもりえつこ}總子さんは、東集落の踊りの師匠を長年務めたり、かつて多くの島人が台湾へと仕事を求めて渡った時代にあっては島に留まり織物にたずさわってきたりと、島の芸能や文化に多大な貢献をしてきた人だ。

東集落から私が暮らす仲筋集落へと、總子さんがお友達の市村美代子さんに会いに来ているところをよく見かけた。2人は美代子さんの家の前あたりでよくおしゃべりに花を咲かせていた。彼女たちのその楽しそうな姿を見かける度に、まるで女学生が2人放課後のおしゃべりが止まらず、お互いに「バイバイ」をいうタイミングを逃してしまっているかのような光景だと思っていた。

集落内を歩いている私を見かけると「あら、あきちゃん！」と軽やかに声をかけてくれた。それもまた、女学生が帰り道でばったり出会い声をかけ合うみたいな雰囲気だった。

少し前のこと、ゆがふ館で機織りをしている總子さんから、若かりしころの話などを聞いた。その乙女な口調としなやかな立ち居振る舞いからは想像ができないようなハードな体験もあった。

踊りの師匠も、織物も、總子さんだからこそできたことで、それはごく自然に紡ぎだされた彼女の人生のプロジェクトみたいなもの。

「ツートントン」という機織りの音は、「あんなこともあったね、ツートントン こんなこともあったね、ツートントン」と、まるで總子さんの話に相槌をうっているようだった。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



白保中学3年生の荻堂^{おぎどう}夢璃菜^{ゆりな}さんを撮影させてもらったのは、2017年のお盆の時だった。白保在住の友人に声をかけてもらい、白保子供アンガマの裏方のお手伝いをしに行った時のこと。夢璃菜さんは当時11歳、「個性的で存在感のある子だな」というのが私の最初の印象だった。

白保獅子保存会に憧れる小学生の男子には、白保子供獅子会が存在している。一方、女子には踊りなどを披露する場は無く、夢璃菜さんは「なんで男の子たちは、お盆に獅子舞とかあるのに、女の子は何もないの？」という素朴で率直な疑問を抱き、夢璃菜さんのお母さんがその疑問に応えようと地域の人達に呼びかけ、皆の協力の下「白保子供アンガマ」を結成させた。

友人宅の一番座と二番座に溢れ出すように子どもたちが集い、お互いに手伝いながら着付けをしたり髪を結ったりしている姿は生き生きとしていて、これから始まることへの心の高ぶりを間近で共感したのを鮮明に覚えている。

先日、夢璃菜さんと「白保子供アンガマ」について少し話をする機会があった。

「お面を被るウシュマイとンミの時は、喋り方が難しい。一緒に活動しているメンバーは、幼稚園生から中学生までと年齢が離れているので、どうやったら皆んなで上手くできるかを考えることもやりがかった。来年からはメンバーとして参加はできなくなるけれど、応援したいと思っている。真剣にやることも大事だけど、何よりも一番に楽しんでほしい」と今までに感じてきたことや、メンバーへの想いを聞かせてくれた。

男の子であろうと、女の子であろうと、活躍できる場を望んでいるならば、叶えればいい。「その場を作ろう」という精神と行動力は、夢璃菜さんたちの未来にどのような影響を与えたのだろう。日々の小さなアクションは、未来の大きな波を作るきっかけになると私は信じている。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 36

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



竹富島出身の小学5年生、^{うちもりまさたか}内盛正隆くん、通称「まささん」は、体は大きく心根優しい少年だ。小さい頃から私が開いている英語で遊ぶ会に通ってきている。下級生のメンバーには、優しく物知りのお兄さんとして頼りにされている。まささんは、ひとひねりのオリジナリティとこだわりを合わせ持ち、何かにつけそれを披露してくれる。

英語で遊ぶ会で作った「英語すごろく」では、その時に彼の中でブームだったトランスフォーマーというロボットの細かいディテールの絵を書き込みながら、下級生のメンバーでも分かりやすいような英語の質問を考えてくれた。またある日には、この会のために自分のおこづかいで購入した袋いっぱいのお菓子をクラスのために差し入れてくれた。

私の記憶に残っている、「まささんらしさ」が光っていた一番のできごとは、数年前にテドゥムニ（竹富島の言葉）大会で、3年生と4年生を合わせた2学年のクラスで「テドゥムニの劇」を作り上げている時だった。まささんは、セリフが多いメインのキャラクターでプレッシャーのある中、一生懸命に練習をつんでいた。

ある日の放課後、体育館で舞台を使った練習をすることになった。生徒たちが体育館内を走り回ったり、おしゃべりに興じる中、まささんは、いくつかのダンボールの箱と共にあらわれた。その箱には、水彩絵の具で草や藪の絵が色鮮やかに描かれていた。

まささんは、舞台をより良いものにする為、舞台の小道具を手づくりしてきてくれたのだ。あの時まささんは、誰かに作ってきたことを見せびらかすわけでもなく、さり気なく「これ作ってきたよ」と舞台に箱を置いたのだった。舞台に置かれた小道具により、景色が浮かび上がり、舞台は特別なものとなった。

まささんのカッコいいところは、「オリジナリティ」と「こだわり」を合わせ持っているところ、そしてそれを自然体で形にすることができ、「良いもの」「良い空間」「良い雰囲気」を作ることへの喜びを知っているところだと思う。

これからは楽しみな「南のひと」である。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 37

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。

石垣島出身の次呂久早苗^{じろくさなえ}さんは、神奈川県にある音楽大学のピアノ科を卒業後、石垣島でピアノ教室を開いている。通ってくる生徒さんは、5歳から大人までと年齢も幅広く技術のレベルも様々だ。

早苗さんがピアノを始めたのは3歳の時。お姉さんの礼子^{れいこ}さんがヤマハ音楽教室へ通い始めたことがきっかけで一緒にレッスンに通うようになった。幼い頃からテレビで流れる童謡などを歌うのが好きで、遊び感覚で曲を覚えてはピアノを弾きながら歌っていたそう。中学生の頃は、毎週通っていたピアノ教室の他に月に一回、那覇まで音楽大学へ進むためのレッスンを受けに通い、高校生の頃は、すでに音楽大学に通っていた礼子さんを頼って大学の講習を受けに行っていたほど熱心だった。

大人数で何かをするのも良いけれど、1人で自分と向き合うことのできるピアノが好きだと早苗さんは言う。生徒さんが帰った後、夜の静けさの中、1人曲作りに没頭する時間は、まさに幼い頃ピアノで遊んだあの頃同様に楽しい。

「子どもたちにも、ピアノを通して楽しむことを実感してほしい」

早苗さんは、石垣島在住の音楽家たちと『ピアチエーレ』を結成し演奏会を開いている。現在は新型コロナウイルスの影響で活動を自粛しているが、八重山の島々を訪問して演奏会をし、生の演奏を聴いてもらうことを目標の一つにしている。

最後に、「表現活動には卒業がないですね」と言うと、「そうなんです。私は生涯学生です」と笑いながら答えた。その姿には淀みのない潔さを感じた。



水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 38

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



石垣島出身の東里明斗^{あいざとあきと}さんと初めて出会ったのは石垣島の coworking space「シマノバ」で開催された写真家のトークセッションに参加した時だった。

会場で見かけた時は、上下黒い服に身を包みちょっとツンとした印象を受けた。会の後、ゲストを囲んでの二次会に参加すると、明斗さんが隣の席に座った。居酒屋の長いテーブルのあちらこちらで「はじめまして」の挨拶や会話が始まり、明斗さんも私に話しかけてくれた。「『南のひと』のページを見たときに、写っていたおばあさんの印象が強かったから僕の中ではずっと水野さんは小さなおばあさんのイメージだったんです。でも実際はずっとモダンだった」と言われた時には、声を出して笑ってしまった。全く悪びれた感のない口調が素直でかわいい人だなと思った。好奇心に突き動かされて喋る子どもみたいで、最初に抱いた印象は一気に塗り替えられた。

明斗さんは昨年末に共同代表の岩倉千花さんと「合同会社 empty」を立ち上げた。

合同会社 empty では何をしていきたいか、明斗さんに聞いてみた。

「人の心が動くすぐ側にいられるような仕事がしたい。言葉で表現できないようなワクワクする衝動や感動を empty に関わるみんなと共有していきたい。そして、いつまでも新しい体験や面白い話を沢山入れていけるようにずっと empty でいきたいです」と話す明斗さん。

(「empty(エンプティ)」とは、「空っぽ」、つまり何も入っていない状態のことをいう)

最後に、ちょっとワクワクするような目標を教えてください。

「共同代表の千花と大きな夢として、島に大学作りたいねなんて話してます」

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 39

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



今年の夏、娘を連れて2泊3日の夏休みを西表島で過ごした。大原にある「民宿なみ荘」に宿泊した。民宿を営む新博孝さん、洋子さんは気さくな人柄で、民宿という人の存在を近くに感じる空間では気をつかわずに済み、とても落ち着いた。

宿泊した晩は、ペルセウス座流星群が見られると聞き、新家に便乗して港へと車で向かった。

さとうきび農家でもある博孝さん、民宿を切り盛りする洋子さん、夏休みで那覇の高校から帰島中だった長女の心葉さん、次女で中学3年生の華凜さんと末っ子の幼稚園年長の太陽くんが新家のメンバーだ。

その晩は、島の青年が星空を背景に新家の家族写真を撮影していた。民家などから離れた場所にある港は暗闇に包まれていて、吸い込まれそうな満天の夜空を背景に家族のシルエットだけが浮かび上がって見えた。暗がりの中、穏やかな家族の会話が聞こえ、ほのぼのとした気分で流れる星を空に探した。

次の日の朝、新家の人々を1人ずつ撮影させてもらい最後に家族写真を数枚撮影した。

夏休みも終わった頃、現像した写真を見返して思ったのは、新家の人々は全員揃って1つの確かな輪郭を作り出しているということ。無口だけれど優しさがにじみ出ている博孝さん、家族のことを見守り、宿を切り盛りするしっかり者の洋子さん、柔らかい雰囲気的心葉さん、凜とした印象の華凜さん、皆んなを和ませ愛らしい太陽くん。それぞれの個性は、音符のようなもので、みんなの音が合わさることで心地よい和音が奏でられる。

新家から感じたのは、西表島という島で育まれた豊かな旋律だった。

水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー